「先史（旧石器）」時代のジオラマ展示の「ビデオクリップ」教材化を試みた博学連携歴史学習

～COVID‐19 の感染拡大が続く状況下での「主体的・対話的な深い学び」のあり方～

秋山寿彦（東京学芸大学附属世田谷中学校）

１．実践学年　中学校第 1 学年社会科（歴史的分野）

２．学習のねらいと博物館の活用

（１）単元名　「人類・文明の誕生と日本列島における人々の生活」

（２）ねらい

①学習指導要領との関連

本単元は、「古代までの日本」に関して、「世界の古代文明と宗教のおこり」及び「日本列島における国家形成」の「先史」（旧石器[*1]・縄文・弥生）時代を対象とする。

本単元では、歴史的分野の導入である「歴史との対話」を受けて、人類のおこりと文明の発生を背景として、日本列島における人々の生活の始まりと変化を考古学の成果を踏まえ、自然環境や狩猟・採集や農耕に関する技術の進化に着目し、グローバルな視点を大切にして理解することを重視する。

また、中学校社会科においては、歴史的分野と地理的分野の学習が並行して展開される教科構造の特色を踏まえ、文明や文化が生まれた地域の気候や地形を始めとする地理的な（自然）環境と条件を歴史的・長期的な視点でとらえる分野間の連携を図った学習[*2]を工夫することが求められる。その際、今日的な課題である「持続可能な発展」で示されている 17 の目標を、過去を生きた人々の姿に重ねて意識していくことを歴史的分野の学習でも取り入れていくことを試みた。

本単元においては、学習者である生徒ひとり一人が具体的な教材や資料、特に歴博展示ジオラマの「ビデオクリップ」教材を「歴史的思考の手がかり」として、人間の生活を支える基礎・基本となっている衣、食、住に注目することで、時代の特色や時代の転換・発展に迫っていく。そして、人々の衣、食、住を支える「道具」と「技術」、さらに各時代の社会を構成する人々の「身分」、現代とは異なる自然環境・社会環境や価値観の中で生きた人々を結びつけたり、分断したりした「心

---

*1　歴史学習は、現行の学習指導要領から小学校第 6 学年後半期と中学校第 1 学年というように近接している。ただ、小学校においては、教科書でも、旧石器時代には触れられず縄文時代の人々の暮らしから日本列島における歴史の学習が始まっている現状を踏まえ、中学校における歴史学習の始まりを構想した。

*2　古代エジプト文明の学習では、元全国中学校社会科教育研究会会長の赤坂寅夫が地理的分野の学習で試みた地理歴史融合型学習・「水で作られたピラミッド」を参照し、歴史的分野の学習において、乾燥帯砂漠気候地域を流れるナイル川という自然環境と古代エジプトの人々の生活に焦点を当てた分野間連携学習に取り組んだ。

性」や「宗教」、そしてこれらを包括する「文明」という概念に注目して歴史を多面的・多角的・批判的（critical）にとらえていく力（「歴史的思考力」・「歴史的な見方・考え方」）を育成することをめざす。

②単元の目標

・日本から遠く離れたアフリカ大陸が、私たちが猿からヒトへと進化を遂げた故郷であること理解するとともに、アメリカ合衆国を中心として「BLM（黒人の命は大切）」という差別に抗議する動きに関心をもつ。

（関心・意欲・態度）

・古代文明や宗教が生まれた場所や自然環境という地理的条件にも注目して、その特色と現代に生きる私たちに与えた影響について多面的多角的に考える。

（知識理解、学びに向かう力）

・小学校第 6 学年における歴史学習を基盤としつつ、小学校では取り扱われていない日本列島における旧石器時代と縄文・弥生（先史）時代について、博物館展示、身近な地域に残る遺跡や出土品、復元イラストを資料として活用して、人々の生活や社会の仕組みと特色を具体的に理解し、困難な環境を生き抜いた先人の生活を中国・朝鮮半島・シベリア及び南海諸島とのつながりにも目をむけ、今日の日本という枠組みにとらわれることなく広く、具体的にとらえる。

（資料活用能力）

・先史（日本列島では旧石器・縄文・弥生）時代の人々の「リアル」な生活に迫っていくために、歴博における年代測定や生態復元にみられる科学的研究の成果に基づいて探究的に歴史学習に取り組む「学際的な関心」を育む。

（学びを広げ、深める力）

（３）博物館との関連

①活用方法　　非来館（アウトリーチ）型活用

② 活用資料　　第 1 展示室の旧石器時代の家族ジオラマの「ビデオクリップ」化した自作映像

３．本実践の指導観～危機に直面する博学連携における「new normal」としての歴史展示の「ビデオクリップ」教材化～

2020 年に世界的な大流行（パンデミック）となり、未だ終息が見えない新型コロナウイルス感染症（COVID‐19）は、これまで自明としてきた教育や学校のあり方を大きく揺さぶる危機的状況を作り出した。

日本だけではなく世界規模での一斉休校により、教室での生徒と教師による対面型・双方向授業が停止した。また、博物館も休館を余儀なくされたことにより、多くの生徒が学ぶ機会を失い、学習する意欲を奪われたのではないかと指摘される。同時に、すべての学校ではないがオンライン授業の実施に伴い、デジタル化・ICT 化と親和性の高い学校教育、歴史学習のあり方が求められることとなった。コロナ禍を契機として、対面型ライブ授業との特色の違いを活かし、学習者ひとりひとりの興味・関心・ニーズに対応した効果的な学びの構築に向けた博学連携のあり方を探っていく必要が明らかになったのではないだろうか。

仮に COVID‐19 が終息したとしても、今後想定される首都圏直下型大地震等の大規模災害が起きた時などに学校の一斉休校が起こりうることを考えた博学連携による歴史教材作成及び授業づくりに取り組んでいくことが今日的課題となっている。

また、歴史学習に高い興味関心をもつ生徒はもとより、さまざまな要因により不登校状況にある生徒が、学校以外の学び場として博物館のホームページから展示資料を「ビデオクリック」化した教材にアクセス、活用して学びを深めていくことには大きな意味があると考える。

本実践は、2019 年 3 月にリニューアルされた第 1 展示室のジオラマ（大型復元生態模型）を取り上げ、「ビデオクリップ」教材化して活用することを試みたものである。

①「ビデオクリップ」という教材

代表的な「ビデオクリック」教材としては、NHK の HP、NHK for　school に置いて各教科の教材が掲載されている。社会科（歴史的分野）の「ビデオクリップ」教材は、約 45 秒～約 4 分 30 秒という単位時間で製作され、授業や生徒の調べ学習で活用することを想定した動画を視聴することができる。NHK の「ビデオクリップ」教材は、生徒が映像を視聴すれば生徒が文化遺産、人物を中心として時代の特色を理解できるようにナレーションによる説明・解説を中心としてまとめられているという点に特徴がある[*3]。

ビデオクリップ教材の先行実践に取り組んだ教科としては、理科をあげることができる。理科においては、実験学習に関して教材教具の準備と費用の軽減化、安全性の確保、再現可能に難しさを伴う示範実験や長期にわたる継続的な観察を視角化し、授業に取り入れるという観点に基づいて、2000 年代前半から「ビデオクリップ教材」[*4]の導入が行われている。

②歴博における「デジタル歴史資料」

歴史資料のデジタル化については、歴博・2017 年 3 月の企画展示、「デジタルで楽しむ歴史資料」において、「洛中洛外図屏風」、「江戸図屏風」や双六など館外貸し出し教材となっている資料を取り上げているが、「デジタル歴史資料」の可能性と意味を紹介している。しかし、鎌倉時代の武士の館などの村落や江戸時代の江戸橋日本橋、越後屋や宿などの商店をはじめとする景観や人々の姿について表しているジオラマのデジタル活用に関しては触れられていない。

③歴史学習における博物館展示の「ビデオクリップ」教材化[*5]の有効性

---

*3　市販「ビデオクリップ」教材としては、NHK の映像素材を用いて山川出版が作成した「動く写真集ムービー中学の歴史」（2006 年）がある。

*4　「ビデオクリップ」教材開発の先駆的研究としては、東京学芸大学附属学校研究会理科部会による「実験・観察ビデオクリップの作成と活用研究」及び神奈川県立総合教育センター・水野治による「地域の学習資源の活用―神奈川の文化財や自然を活かしたデジタル教材開発」（いずれも 2003 年）。特に、水野実践は神奈川県立歴史博物館と連携し、博物館資料の教材化に取り組み、動画公開・配信方法を課題として提起している。

*5　2020 年 7 月から歴博のホームページでは、YouTube で各展示室と体験学習の動画紹介を始めた。この動画は、歴博見学のための事前オリエンテーションとして歴博概観するた

・歴史研究に裏付けられた資料（大型生態復元ジオラマ）*6 を撮影した動画（「ビデオクリップ」教材）視聴することにより、生徒が人々の生活や時代の特徴に具体的に迫っていくことができる。
・ジオラマを中心とする具体的展示物を「ビデオクリップ」教材化することによって、旧石器時代の人々との「対話」を試み、人々の生活や時代の特色について考察する力や説明する力を育成することができる。
・「ビデオクリップ」化されたジオラマを、共同的、多面的多角的に読み解いていくことにより、博物館に対する興味、関心、「見方」や「考え方」の基礎を養い、広く、深い視野から「歴史を学ぶ意欲を高める」ことができる。

④非来館型博学連携歴史学習におけるビデオクリップ教材作成にあたっての留意点

本実践では、2019 年 3 月にリニューアルし、歴博による考古学の最新研究成果を可視化した第 1 展示室・先史（旧石器）時代の大型ジオラマを「ビデオクリップ」教材の対象とした。「ビデオクリップ」教材のナレーション作成にあたっては 2019 年 6 月第 1 回博学連携会議における藤尾慎一郎による第 1 展示室についての解説、工藤雄一郎による「歴博 212　特集：日本列島の先史・古代―総合展示第 1 室リニューアル テーマ I 最終氷期に生きた人々」（2019 年）に依拠した。

【第 1 展示室：「ビデオクリップ」化した先史時代のジオラマ展示内容の構成】

ナウマンゾウを中心とした南関東の平野部の植生を始めとした自然環境・生態系への着目
「 ジェンダーの視点」を意識した先史時代の家族の生活（性別役割分担）
道具づくり（黒曜石）　衣服　住居（テント）　狩猟（落とし穴猟）
食生活（石焼き蒸し調理）

・ジオラマの歴史的背景へ生徒を誘う「問い」をナレーションに取り入れているが、歴史的知識の確認、習得よりも歴史的な見方や考え方を働かせるという視点から、NHK が作成した教材のような展示資料についての説明・解説を極力、少なくする動画とすることを試みた。
・展示されている個別のジオラマを、生徒が「ビデオクリップ」教材の視聴を通して一つの「ストーリー」として結びつけて、旧石器時代の人々の生活に着目して「時代像」を描いていくことができるようになる学習を志向した。
・「ビデオクリップ」教材を活用することにより生徒の歴博への来館希望意識を高め、博物館を見学する学習において、ワークシートに、生徒が気づいたこと、発見したことを記入していく従来型の学習から、デジタルカメラやスマートフォンを活用して、見学内容を「ビデオクリップ作品」化して、紹介、表現、発信していくという OECD がこれからの学習のあり方として示す「新しい価値の創造」に向かう「発展的な学習課題」のあり方を視野に入れていくことが可能となる。

めには有効であるが、歴史学習の授業で活用することは難しい。

*6　博物館における歴史展示に関する復元模型（ジオラマ）の製作と検証については、小野昭著、「ビジュアル版　考古学ガイドブック」新泉社（2020 年）参照

4　指導計画（９時間扱い）

主な学習内容・活動	□指導上の留意点　■評価の観点
＜第1時間目＞「人類の誕生と世界への広がり～私たちは皆、アフリカ人～」 ・大地溝帯が生まれた環境変化をＣＧで捉える。 ・道具が狩猟・農耕と食生活に与えた影響を話し合う。	■ヒトと猿の違いを指摘できる。 ■人類の「出アフリカ」を世界地図からとらえる。 □人類誕生の地・アフリカとBLMを関連づけて意識できる。
＜第2時間目＞「砂漠で生まれた古代エジプト文明」 ・乾燥帯砂漠気候のエジプトで文明が生まれた理由を地図帳を調べ話し合う。 ・ピラミッドは奴隷が強制労働でファラオのために作らされたのかを話し合う。 ・パピルスに描かれた人々の仕事・「身分」から古代エジプト社会の特色を考える。	■映像資料から、ヘロドトス以来の「ピラミッド奴隷説」という定説に対する見方・考えを批判的に検討できるか。 ■ピラミッド建設について新たな見方・考え方を持つことができたか。「ピラミッドは、○○○で作られている」を自分の言葉で説明する。
＜第3時間目＞「仏教を生んだ古代インドの文明」 ・仏陀（シャカ）の教えの特徴とアジアへの広まりを映像と地図からとらえる。	□地理的分野でのインドの人々の生活とヒンズー教についての学習を思い起こす。 ■インドの人々は、なぜ「平等」よりもカーストを選んだのか考える。
＜第4時間目＞「黄河の流域で生まれた古代中国文明」 ・黄土高原の自然環境の変化に目をむける。 ・万里の長城から農耕民と遊牧民の関わりをとらえる。	□地理的分野での中国内陸部（黄河流域）の農民の生活を思い起こす。 ■中国で誕生した古代文明が日本やアジアの国々に与えた影響を説明できる。
＜第5時間目＞「イエス・キリストとローマ帝国」 ・ローマにちなんだ歴史の諺と歴史地図からローマ帝国の大きさと特色を理解する。 ・新約聖書からイエスの教えを受け入れた人々について考える。	□キリスト教がローマ帝国の辺境地である中東・パレスチナで生まれたことを理解する。 ■「もしも、イエスが誕生していなかったら世界は・・」という問いに対する自分の考えをまとめる。
＜本時＞「日本列島で最初に生活した人々」 ・黒曜石片からナイフの切れ味を体感する。 ・氷河期の東アジアのイラスト地図から自然環境の特色を読み解く。 ・「ビデオクリップ」を視聴し、旧石器時代の家族の生活をグループで話し合い、まとめる。	□黒曜石片でけがをしないように石器ナイフの使い方を見せる。 ■地図帳を活用し、氷河期と現代の日本列島周辺の違いに気づく。 ■　ジオラマの家族にインタビューで質問したいことを書き出す。
＜第7時間目＞「歴史人口で考える縄文時代」 ・縄文土器・土偶（復元）に触れる。	□縄文土器の使用方法から縄文人の食生活を考えさせる。

・「ビデオクリップ」（大森貝塚遺跡庭園、多摩ニュータウンに復元された竪穴住居）を視聴する。 ・復元イラストから縄文人の生活を考える。 ・縄文時代の推計人口変化グラフを読み解く。	□土偶や祭りのイラストから縄文人の思い願い（心性）に目をむける。 ■人口の変化、人口密度の偏りの原因を予想する。
＜第8時間目＞「戦争が始まった弥生時代」 ・古代米（赤米・黒米）・弥生土器に触れる。 ・弥生時代の推計人口変化グラフを読み解く。 ・「ビデオクリップ」（文京区弥生町の石碑、登呂遺跡、大塚歳勝土遺跡）を視聴し、吉野ヶ里遺跡と弥生時代の人々の四季の生活についてのイラストを読み解く。	□歴博による放射性炭素年代測定のビデオと稲作開始時期が早まったことを伝える新聞記事（2003年5月20日・毎日新聞）を紹介する。 ■「縄文人と弥生人の架空対話」を創作する。
＜第9時間目＞「卑弥呼と出会う」 ・金印に刻印されている文字の意味を考える。 魏志倭人伝（原文）を資料として、卑弥呼や邪馬台国の姿を読み解く。 ・「ビデオクリップ」（大阪府立弥生博物館の卑弥呼像）を視聴し卑弥呼にインタビューする。	□金印の復元レプリカをノートに押印してみる。 □魏志倭人伝の読み解きは、グループで協働して取り組む。 ■資料や発掘調査から明らかになったことを踏まえ、「邪馬台国の謎」に目をむけインタビューする。

5　本時の実践の概要

【本時の中心的な問い】

『あなたは、「歴史タイムマシン」に乗って先史（旧石器）時代へタイムスリップしたら、今から約２～３万年前の人々とどのような話しをしてみたいですか？』

	学習内容・活動	指導上の留意点と評価の観点
導入	黒曜石・ナイフ状黒曜石片に触れる。 資料集で、黒曜石の産地を調べる。 復元打製石器にも触れる。 教科書の年表で、日本列島での旧石器時代の年代を確認する。	ナイフ状黒曜石片で人参の皮むきを見せる。 先史時代＝文字による記録がない時代で、現在は「未開」と結びつくことのある原始時代とは呼ばないこと伝える。
展開1	氷河期の東アジアのイラスト地図（朝日百科「日本の歴史」）で旧石器時代の日本列島のようすを確かめる。 ・サハリン（樺太）とつながる北海道 ・日本海がほぼ巨大な「湖」 ・海面が下がっている ・大陸棚が陸になっている ・マンモス、ナウマン象、オオツノジカがいる	地球温暖化のなかでおきている水没する島国（キリバス・ツバル）やシベリアの永久凍土が溶けてマンモスが見つかること巨大化するサイクロンで家を失うバングラデシュの人々など地理の学習と関連づける。 相沢忠洋の「岩宿の発見」、

		野尻湖でのナウマン象の骨の発掘に触れる。
展 開 ２	「歴史タイムマシン」に乗り込んでみよう。 ・ナウマン象が生息していた約４万年前の関東平野南部 ・父親と男の子の仕事 （黒曜石での道具づくり） ・母親と娘の仕事（皮加工と針仕事） ・祖父の鹿の解体作業と住居テント （解体用　黒曜石片ナイフ） ・動物の骨も道具に加工 ・兄の狩り （落とし穴への獲物追い込み・やり） ・祖母と孫による調理（石焼き蒸し調理）	旧石器時代の人々がどのようにナウマン象に向き合っていたかのか想像する。 「野尻湖の象」にも触れる。 「ビデオクリップ」を視聴して気がついたことや確認したいことをノートにメモする。 食事の材料・メニュー、調理方法、味付けにも目をむける。
まとめ	旧石器時代に生きた家族の生活について、「ビデオクリップ」から発見したことを、資料・「最終氷期に生きた人々」を活用して、グループでまとめる。 旧石器時代の家族に質問してみたいことを発表する。	国立歴史民俗博物館編「わくわく！探検れきはく 日本の歴史Ⅰ」（吉川弘文館、2019年） 「ビデオクリップ」で視聴したことと関連する事項を教科書や資料集でも確認するようにアドバイスする。

６　成果と課題

～「ビデオクリップ」教材を視聴した生徒の主な感想、意見を中心として～

本実践に取り組む 2019 年 6 月の時点では、最新の考古学・古代史研究の成果を示すリニューアルされたばかりの第 1 展示室を活用するという漠然としたイメージしか有していなかった。しかし、藤尾慎一郎の展示室解説を受けて、旧石器時代に関して復元されたジオラマ（大型生態復元模型）の一つ一つが、遺跡・遺物を中心とする発掘と調査研究に基づいて解釈された成果であり、さまざまな制約を意識しつつ、過去を可能な限り正確に可視化した展示であることを改めて知ったことが、本実践を試みる動機となった。とりわけ、旧石器時代の人々の仕事と役割分担については、ジェンダーの視点からジオラマのあり方を慎重に検討したとの解説を重く受け止めた。

各展示室ではすでに、タッチパネルを活用して展示資料についての理解を深める工夫がなされているが、見学者が、ジオラマの細部にどのように着目していったら人々の生活や時代の特色に迫っていくことができるかという動画を用いた工夫を今後取り入れていく必要性があると考える。

本実践は、COVID‐19 の感染が拡大する直前の 2020 年 1 月と再拡大後の 2020 年 12 月の２度にわたり中学１年生（各年度 140 名、合計 280 名）を対象として取り組んだものである。

【本実践学習後の生徒の感想・意見記述の集約】

a これまで博物館のジオラマをじっくりと観察して考えたことはなく「すごーい」ぐらいにしか思っていなかったが、じっくり見て、ジオラマから色々なことがわかるということに気がついた。
b ナウマンゾウのサイズ、質感や先史時代の人々の表情がリアルに感じられた。
c 先人の工夫が目と耳から入ってきた。
d ビデオを見なければ、博物館の見学ではスルーしてしまうと思う。
e 先史時代の人々の家族の具体的なようす、とくに仕事や食事がよくわかった。
f 専門用語が多く使われている博物館のパネル解説で理解しようとしても長く難しいので、映像とナレーションで楽しく理解することができた。
g 教科書や資料集よりも情報量が多く、先史時代を3D、立体的に理解することができた。
h ナレーションを手がかりにして旧石器時代の家族と自分だったらこんな会話をしてみたいと思った。特に、子どもたちと・・・。
i 旧石器時代の人々の姿を、あのような模型に表した根拠（エビデンス）は何なのか詳しく知りたい。それは、あのジオラマをどこまで信じてよいのかという疑問があるからです。
j 家族の生活・仕事を表している部分は、男女別に仕事が分かれていて、地理の学習で繰り返し取り上げられたテーマであるSDGs的にいうと「平等」な時代とはいえないと思った。
k 先生が今の日本語で、旧石器時代の人びとにインタビューをしていたが、私達が話す言葉がその時代から通じていたのだろうか？言葉が通じないとしたら、映像のどこかに通訳を入れることが必要だと感じた。
l 先生のナレーション以外に音による情報（象の鳴き声や人々の会話など）がないことが気になった。また、人形の口元が皆、閉じていることが気になった。
m CGやバーチャルを取り入れて先史時代の人々の生活を再現したほうが深い学びにつながると思う。
n 先史時代の人へのインタビュー形式という方法は、わかりやすい工夫だったが、先生がひとりでやることには無理がある。
o 博物館へ行かなくても、実際に見学しているような感じになった。佐倉にある歴史民俗博物館は、遠くなのでなかなか行くことができないが、旧石器時代以外のものも見たいので機会があったら行ってみたいと思った。

生徒の感想・意見の a～g は、旧石器時代のジオラマが中学生にとって非常にインパクトがあり、時代を実感を持って「リアル」にとらえていくうえで極めて有効な資料であることを示すものと考えられる。しかし、a・d の記述から、ともするとジオラマをちらっと見て「スルー」してしまうような見学を多くの来館者がしているのではないかと思われる。

このことは、中学校の歴史学習において、「ビデオクリップ」教材を活用してジオラマ展示の見方を「方法知」として獲得していくことの重要性を示すものである。旧石器時代

の大型ジオラマで見方を習得することにより、江戸橋・日本橋の中のさまざまな人々を表した小さなサイズのジオラマを単眼鏡を活用して見学していく場面などでも「学びの転移」としてはたらき、学習効果を高めることが期待できる。

また、f の記述から、博物館の展示解説について専門性や正確さとわかりやすさの観点からの見直しを学校教育の側から具体的に提案していく必要があることがうかがえる。いずれにしても、g で記述されているように、教科書や資料集に基づく教師による講義・解説を中心とする歴史の授業から、学習指導要領で示される「主体的で対話的な深い学び」を具現化しようとするとき、博物館と連携した歴史学習の重要性を再認識する。

「ビデオクリップ」化した旧石器時代の映像を視聴した生徒たちの多くが、画像としてのジオラマとともにナレーションやインタビューという音声情報に多くの感想意見を寄せている。この点に関して、2020 年 8 月の博学連携研究員会議では、作成されたナレーションやインタビューでの会話が、旧石器時代の人々の生活に迫っていくことを意図した「問い」を中心にして構成されていることには一定の理解は示されたが、生徒の「見方や考え方」に対して「価値誘導的な側面がみられる」との指摘を受けた。歴史的事象の事実を確認し、知識を獲得することを主眼とするこれまでの映像教材から「生徒が主体的に考える」ことが可能となる「ビデオクリップ」教材としていくためにも「問い」やナレーションの見直しの必要性が浮かび上がってきた。こうした課題を踏まえつつ、h で記述された旧石器時代の子どもにインタビューをしてみるという学習活動のアイディアは、大阪府立弥生博物館展示の卑弥呼像の「ビデオクリップ」を用いた学習計画の第 9 時間目：「卑弥呼と出会う」の学習で、「卑弥呼へのインタビュー」というにかたちで活かすことができた。今後、歴博の展示資料を活用して「ビデオクリップ」教材の作成に取り組むとしたら、研究者の専門的な知見と学校で児童生徒と向き合っている教師が、ナレーションを中心として共同、連携して動画を作成することが重要である。

歴史学習に限定することなく勤務校の社会科では、批判的思考力の育成をテーマとして学校研究に取り組んできている。i～l の記述は、ジオラマ資料の根拠（エビデンス）やジオラマ作成に至る研究の解釈に迫る批判的思考力の核心に迫る「深い問い」と考えられる。特に、j のジェンダーと関わって提起された疑問は、過去を現代の視点だけからとらえることの問題性に気づいていく点に留意しつつ、藤尾解説において述べられたことと地理的分野における現代の世界の諸地域についての学習と関連づけている点から、生徒全体へ投げかけてみる「深い問い」を含む課題として受け止めた。

m～o に示されているように本実践で作成した「ビデオクリップ」教材には、多くの技術的改善点が残されているが、コロナ禍の状況が継続し、博物館見学や修学旅行などの校外学習の実施が困難な状況では、「ビデオクリップ」教材の作成に取り組み、配信するという取り組みを進めることに意味があると考える。

最後に、本実践で試みた歴博の旧石器時代のジオラマに関する「ビデオクリップ」教材を視聴した生徒が、「博物館って、ドラえもんのタイムマシンに乗ってタイムスリップしたみたいですね。」「歴史タイムマシンは、旧石器時代だけで終わりなのですか？」という感想を話してくれた。

こうした生徒の声を受けて、指導計画に示したように縄文・弥生とともに、古墳・飛鳥・奈良・平安時代までの「ビデオクリップ」教材の作成に取り組んだ。

特に、古墳時代の学習では、勤務校の地域に残る亀甲山古墳・蓬莱山古墳、野毛大塚古墳の現地映像と大田区郷土博物館の古墳展示室のジオラマ（南武蔵野首長・王権継承儀式に参加した人々・埴輪工房で働く職人）に対するインタビューというかたちの「ビデオクリップ」教材を作成し、「歴史タイムマシン・プロジェクト」として本実践での取り組みを改善し、継続している。

歴博の博学連携研究を起点とする「歴史タイムマシン・プロジェクト」について学習している生徒が 2021 年 3 月 2 日、朝日新聞掲載[*7]の投書で以下のように記述していることを本実践のまとめとして紹介する。

「歴史タイムマシンに乗って」（中学1年女子）

私の中学校の歴史の授業は、少し変わっている。ある日先生が、「今日は皆さんに歴史タイムマシンに乗ってもらいます。」と言った。私はその言葉を聞いて、『ドラえもん』に出てくるタイムマシンに乗れるような気がしてワクワクした。

すると先生は、教室のスクリーンに動画を流し始めた。その瞬間、スクリーンから先生の声が響いた。先生の行っていた「歴史タイムマシン」とは、先生が遺跡や博物館に行き展示物にインタビューするかたちで録画するものだった。例えば旧石器時代の授業では、博物館の旧石器時代の模型に、先生が当時の生活について質問し、先生が声を演じる旧石器時代の人がその時代について詳しく説明してくれた。

静岡県の登呂遺跡、横浜市の大塚遺跡、大阪市の弥生文化博物館など、「歴史タイムマシン」の行き先は様々だ。弥生文化博物館では、魏から贈られた鏡を両手で掲げる卑弥呼像が写され、タイムマシンに乗って本当に卑弥呼に会ったような気持ちになった。

コロナが流行し、第３波がまだ収まっていない仲、授業でできることも少ない。しかし、この「歴史タイムマシン」で、私は日本の数々の場所を飛び回っている。これらも様々な時代に旅するのがとても楽しみだ。

参考文献

藤尾慎一郎・松木武編『ここが変わる！　日本の考古学　先史・古代史研究の最前線』吉川弘文館　2019 年

稲田孝司著　『先史日本を復元する１　遊動する旧石器人』岩波書店 2001 年

佐藤宏之著　『日本列島の成立と狩猟採集の社会』（岩波講座　日本の歴史第 1 巻　原始・古代所収）岩波書店　2013 年

岡村道雄著　『日本の歴史 1　縄文の生活　改訂版』講談社 2002 年

金関 恕監修　早川和子画　『よみがえる日本の古代 旧石器～奈良時代の日本がわかる復元画古代史』小学館　2007 年

*7　社会科の授業において、社会参画を企図して学習した内容について生徒自身がどのように受け止めているかを中心として、新聞各社の読者投書欄へ意見を発信する活動に取り組んでいる。２０２０（令和 2）年度は、COVID‐19 をテーマとするものをはじめとして 62 点の投書が掲載された。

朝日百科日本の歴史新訂増補１　原始・古代『人類の誕生と列島の自然』
朝日新聞社 2005 年
小野昭著　　『ビジュアル版　考古学ハンドブック』新泉社　2020 年
堤 隆　　『ビジュアル版　旧石器時代ハンドブック』新泉社　2019 年
国立歴史民俗博物館編『わくわく探検！れきはく日本の歴史１』吉川弘文館　2019 年